

翻刻「難波千句」

板 坂 元

談林俳諧の一資料「難波千句」を翻刻しておきたい。原本は東大図書館旧酒竹文庫蔵。横本一冊で、題簽は左肩、なかに判離していて「難波千句」とある字のうち「難」の字はかすかに字体を認められる程度となつてゐる。柱刻は「千一(……四十六)」とあり、本文の行数は十二行、序跋ともに欠けている。

追加の終りにあるように、本書は大坂の高滝以仙の興行せる千句で、追加八句の発句の季により早春の興行であつたらうと思はれる。慣習的なあつかい方にならえば、刊記の「延宝五巳霜月吉日」によつて一応その年の正月に催されたものとしてよからう。連衆は益翁(以仙)・本秋・宗先・益友・均朋・益春・正信・柴舟・集言・正猛・勝政の十名。当時の大坂俳書によく名前に見える人々である。例えば延宝六年の「大坂檀林桜千句」には益翁・均朋・益友・柴舟が、同八年の「大坂八百韻」には益翁・益友・正猛・均朋の顔ぶれが見出される。宗因門の俳人達にも親疎の關係はそれぞれ存してゐたであろうが、それらがめいめいのグループを作つて對抗意識をもつたかどうか遽に断じがたいけれども、難波千句

の連衆には特別な結びつきがあつたことだけは云えそうである。益翁は「桜千句」でも「大坂八百韻」でも巻頭の発句をつとめており、この連衆の長老格ともいふ人物、それだけに俳歴ももつとも豊富である。

云うまでもなく本書の成立した頃は、いわゆる談林俳諧がもつともはなやかに脚光をあびていた時期であり、作風も軽快でしかも奇に走らず新風の息吹きをよく味うことのできるものである。

本書の伝来については余り知るところがない。伝本も管見したかぎりでは旧酒竹文庫蔵の一本のみである。翻刻して一般の眼に入りやすくする所以である。

なお翻刻にあつて方法は慣行にしたがつた。最後に撮影翻刻を許可された東大図書館、翻刻につき種々御注意を給つた前田金五郎氏、撮影をお願いした田中義象氏に深謝したい。

第一梅何酢

梅か香や難波の御調御物伽羅

異国の事もこの君の春

絵図に引かすみも浪も治りて

普請このみの末の真砂地

茶の湯者も今住かゆる軒の松

圓行燈もけふる露霜

道具市ふりしく月の秋時雨

留帳つくる鹿の声く

久離さる柞の紅葉色付て

三ヶの津をもはらふ山風

御目見の跡より晴るゝ空の雲

飛かふ鶴や舞子なるらん

西川のなかれの者もかふるたち

化粧の水も鳴滝の末

今朝は又氷にとつる塗鹽

月影やとる雛さまの袖

うつくしい男有けり里の秋

妄想やふる鷹の夕声

益翁

本秋

宗先

益友

均朋

益春

正信

柴舟 二一オ

集言

正猛

勝政

益翁

本秋

宗先

益友

均朋

益春

正信

二ウ

さとりきつた心も晴し嶺の霧

一休已来むら雨の雲

墨跡のなかにうつつる花散て

卓の香爐も匂ふ藤かえ

行春の色や青磁にまかふらん

かすみにこもる天龍寺山

御偷旨のおもてたしかに帰雁

巳軍兵をこるうら風

将棋さす袖は汐なる蟹衣

雨中さひしき筈の下臥

奈良茶焼藻屑の煙立のほり

念仏講に松風の声

錢箱にかねをかけたか時鳥

鎌を通す有明の空

智恵の輪のひかりは同じ野辺の露

一句てんじてかはる秋風

文臺にさしかかりたる夕気色

あつち扇も紅井の雲

降雪の跡立かへす腰屏風

薬うりあり松の下庵

夕鳥長口上のしるへして

その外見せ物猿さけふ声

しめ出しや岑の梯のほりはし

柴舟

集言 二一ウ

正猛

勝政

益翁

益春

宗先

柴舟

正信

益友

集言

本秋

勝政

宗先 二一オ

均朋

益翁

本秋

正猛

宗先

集言

益友

本秋

正猛

染地をあらふ谷川の水

かつ散て紅葉しからむ錦草

鏡ふくろも結ふ朝露

うきなき天下の光秋の月

御年貢米の石磨の音

もとよりも赤の玉垣土朱にて

かなかはらげに常の灯

膠とく水にやとせる法の花

皆はりぬきの柳うくひす

入子枕ねられぬ野辺の雪消て

毛氈絵むしろたゝむ春風

打出る浪やをりけん棧敷より

はなれ鶉あれは離囚人

大編笠岩ほの肩にひつかふり

谷の扉ものそく化契部屋

村松や青暖簾の色好み

苔地の露を乱すからくり

打むかふ小的の目当きりくす

舟と陸との野分沙風

肴店月に声する沖津浪

俄客人いさり火のかけ

陽気買おもひあまりて飛螢

草もみたるゝはり合の恋

均朋

益翁

正信「三ウ

紫舟

勝政

益春

益翁

正信

益友

集言

益春

均朋

柴舟

益翁

本秋「三オ

勝政

宗先

益友

益翁

正猛

集言

宗先

正信

三ウ

此酒に大中をして吹風

舟路の首途食椀汁椀

品玉を取手もたゆき木綿かつら

神樂乙女も打たり太鼓

此鉾はいつこのほこそ番の者

鳥見の通ふ淡路嶋山

やはらにもうらあるかたは須磨の関

松は磯なれて板敷のうへ

台尻を引てかゝれる鳶葛

あいやしてゆく山路露けき

鳴すかる声も跡なき病あかり

扱御前に月ひとり武者

喧嘩師を呼出さるゝ花の時

しこみの棒にかゝる春雨

燕も軒端になれて蕎麦切や

芝居の果をまつ小田の原

吳竹の陰にかくるゝすつはのかは

水のけふりや付火なるらん

鴛鴨をねらひよりたる玉粟

御法度やふる志賀の浦人

もろくゝの難行雑修松の声

商ひ口に蟬さはく也

柴の戸に住やならへるやりてかゝ

益翁

宗先

正信

勝政「三ウ

益春

均朋

本秋

益友

正猛

集言

紫舟

益翁

益友

正猛

完先

均朋「四オ

勝政

正信

本秋

益春

柴舟

宗先

正猛

もらふ一步に別路のかね

うつり香の匂ひも床し箔外郎

恋の染きぬ又はいろ紙

待暮は割符合て聞の月

墨縄むすふ糸の小薄

樽一つ野辺の村萩分越て

ゑほし名かゆる松虫の声

御具足肩にかけたる音羽山

滝のなかれにつくねりもの

夕日影浪も色あるにせさこしゆ

寺若衆の袖の松風

天神のめくみを祈る花咲て

千句の拍子鳥のさへつり

益友

正信

益翁

集言

柴舟「四ウ

宗先

勝政

本秋

均朋

正信

益友

益翁

正猛

益翁 十二 均朋 八

本秋 九 益春 七

宗先 十一 正信 十

益友 十 柴舟 八

集言 八

正猛 九

勝政 八

「五オ

第二 鶯四字上下略

鶯の哥説経や法の声

小弓三味線青柳の糸

田舎舟春の湊に風待て

磯田に残るたはら何石

柱あけて根次時分の管屋形

わきぬる羽蟻や真砂乱るゝ

月雪の詠めはおなし銀は山

嵐は松にかよふ本丸

あたなりし世は定なき番替

いとふうき身やお預けの者

誰か手かけ尋入たる嵯峨の山

捨かねひゝく今朝の別路

ふられたる袖は泪にかきくれて

君かかた身に残る明樽

壺漬のからき思ひにしひかぬ

餅突の夜の霜の足跡

千鳥鳴汀の浪の舟おろし

御上使めくる須磨の秋風

影暮て月こゝもとにかけ目安

よい分別をかりわたる鹿

からくりの種をもとめて花栴

水からうすのさほの川浪
綿実や雪をくたせる山嵐

本秋

益友

益翁

益春

宗先

柴舟

均朋

正猛「五ウ

正信

集言

勝政

本秋

益友

益翁

益春

宗先

柴舟

均朋

正猛「六オ

正信

集言

勝政
益翁

箴籬と成し竹の一村

棚もとのあたりに近き里見えて

朝氣のけふり御茶か出まする

大酒の跡に重る嶺の雲

吉野ゝ奥の役者友達

若衆すき去年の枝折の道かえて

桜にとはん揚屋町筋

かし駕籠の窓の外山の夕霞

春雨過るその行たふれ

此比は飢饉と成てなく蛙

瘡傷寒つゝし山吹

和氣丹波龜山殿の庭の月

秋の御幸は古来まれ也

大男台笠立笠露分て

浪路をいそく関舟の加子

足も手も黒みてのぼる汐煙

清書時分藻屑かく袖

無言ちん臥猪の床をあらそひて

籠にをみては鈴をふる音

母衣負て尾花か末や分ぬらん

いかに敦盛誰しのふ草

人形の袖さへくたす露なみた

灸すへすむ古跡の月

益春

宗先

益友

均朋

集言

本秋

柴舟

正信

宗先「六ウ

益春

益翁

勝政

正猛

柴舟

均朋

正信

益友

宗先

勝政

正猛

益翁「七オ

均朋

正猛

三

瘦猫の声打添てなく鶉

深草山につゝく寺町

若葉見る花折敷て青物屋

雲井かくれにのこる日覆ひ

龍のほる跡より水のはね釣瓶

螺貝いつる蓬萊の山

あん餅は老す死すの菓也

菊の雫をのこす提重

秋の霜はらひもあへぬ風呂あかり

御師に着ては露の下臥

毎年の書状の奥の月更て

又かねかりに浅茅生の宿

入札て小野ゝ篠原新開

あられたはちる江戸風の音

火消役夢も結はぬ夜半の空

百ものかたりさゝめこと也

哥かるた思ひのかんさし取添て

又はかりきぬ嫁入こしらへ

下女かくて三年も過行は

清水かもとへ手桶をさけて

打なひく柳は散てこけら鮎

中酒は一へん通る秋雨

月くらき山をこなたに坂迎

本秋

益春

益翁

集言

勝政

益翁

正信

宗先

益春

正猛「七ウ

益友

集言

本秋

柴舟

宗先

勝政

益翁

均朋

集言

益春

益友

本秋「八オ

柴舟

八重たつ雲や先陣後陳

おもひく式は遊君天乙女

恋の寝道具浪にほすらん

ふしつむ泪の海の破損舟

身は埋木の丸太材木

奉加帳めぐりにけり春日山

釈迦傘二ぼとけ台座仕直す

花の紐とくや膠の法の水

油煙の墨にかすみたな引

作り髭吹おろしたる春の風

山のすかたをかへてをしり

乳の下の玉を流する滝津浪

薬師の御影拜む三熊野

茶匙先におもひをこせよ我も又

いくようらみのつもる塗竹

黒髪の乱れかちなる油筒

泪の雨にすは化ものか

草の庵小芝居にして是しやく

菖蒲ふきそふ小軒の張出し

千日の廻向も過て行蟹

月影うすき曲物の米

色かへぬ松の扉のお大黒

祈るそく秋風の雲

宗先

益翁

集言

本秋

益友

均朋

正信

正猛

勝政

集言

均朋「八ウ

正信

益翁

宗先

柴舟

益友

本秋

益春

正信

勝政

宗先

益翁

正猛「九オ

名 から衣うちものわきに叶ふまし

針一本によはる虫の音

かまほこの煙淋しきのへの暮

この世のかきり扱もいとし子

しこためし錢をつくして遊物

難波の事もよい夢を見た

宝舟板木にひらく花の春

長者講する宿の梅か香

本秋 九 宗先 十一

益友 九 柴舟 七

益翁 十二 均朋 九

益春 九 正猛 七

益友

益春

均朋

宗先

集言

正信

本秋

益翁

正信 十

集言 九

勝政 八

第三 花二字返音

目をいやしめ耳迄酔や花に酒

はやりことはは驚の哥

おも役者高ねの雪や残るらん

日風呂に入し草の下筋

剃刀も又手をにきる初蕨

益友

益春

本秋

柴舟

益翁

ウ

重る岩の枕箱あり
 滝津浪落くる月の舟遊山
 紅葉をなかくす鞞ほまほう
 手習子森の下露分入て
 中間絵馬もかくる白木綿
 割付のかねを包て神々楽
 霜打はらふ算盤の音
 入子鍋松はもとより煙にて
 蟻の磯屋もかし座敷也
 養生に行平都へのほり給ふ
 五人一所に杖てそろく
 公儀へは汝かために来たりたり
 末寺なからも御朱印替
 血脈もいたゞきつれて法の場
 隠居のかみさま茶摘水汲
 ひとり下種仕へてそよし宿の月
 始末はなしの跡の秋風
 小商ひ浮世をわたる天津雁
 浦路はるかに浪の舟つき
 白雲の末に重るほりの米
 借屋あまたに桜さく山
 ふきと吹春風いつれ火用心
 かすみかくれに乱すうち綿

正猛
 宗先
 集言「十オ
 均朋
 正信
 勝政
 益友
 益春
 本秋
 柴舟
 益翁
 正猛
 宗先
 集言
 均朋「十ウ
 正信
 勝政
 益翁
 本秋
 柴舟
 宗先
 益友
 均朋

二ウ

大夜着の裾野、原は雪降て
 病ひの床を出るまたら猪
 さかやきも長う生たる草村に
 きのふの科人けふの討首
 似せかねもうつれは替る飛鳥川
 酔をはしらかす水の遠近
 三日の月小指の爪をはなされて
 太夫のはりあひ恋草の露
 番組をあらそふ虫の声す也
 百人衆の袖の秋かせ
 夕暮の詠めにつゞく哥かるた
 清書しまふあとの海つら
 立さはき友呼千鳥草履取
 宇治のさらしのもめん着物
 卯花の盛をつくる御簡略
 今山賤も家老筋也
 下間のすゝめによりて門徒中
 能嬰束も法のころも手
 親こゝろ観音勢至弥陀如来
 三ツ具足なる鶴の一声
 からかねに月の太山の花散て
 地黄煎いつれかほる梅か枝
 れろくゝのこてふも庭に舞遊

勝政
 益翁
 正信
 本秋「十一オ
 正猛
 勝政
 益春
 集言
 均朋
 正猛
 正信
 柴舟
 勝政
 益翁
 宗先
 益友「十一ウ
 本秋
 集言
 柴舟
 均朋
 益翁
 益春
 正猛

三

三ウ

よたれたら〜霞なかるゝ
 東風に吹風に匂ひて瘡葉
 しのねの生る野辺の浅沢
 牛引も跡をしたひて行螢
 耳をあらふそ夕立の雨
 さひ鏝のくろめる雲やおほふらん
 御煩しきりに堀る土の底
 辻井戸の水あれは又火神鳴
 弘法るます卷向の山
 大筆に今朝降雪の跡付て
 上々ふしなし松の下風
 軒近き御成普請を見渡せは
 門跡様や月をむかふる
 秋萩の紫衣なか〜と
 死人のふせる片岡の露
 衆道事いひあかりたる鹿の声
 家中みたらに浦は恋風
 買かゝりはらはぬ浪の須磨明石
 おは打からす海士のすて草
 藻屑かく杖をくゝる蟻卷に
 たはこのやにを残す真砂地
 灸おろす跡は煙に霜消て
 雪踏のうらにふめる夕露

柴舟 本秋 勝政 益友 益翁「十二オ」 正信 宗先 益春 正猛 益翁 均朋 宗先 集言 益友 正信 均朋 益翁「十二ウ」 柴舟 勝政 集言 宗先 益翁 益春

名

かすはきも秋の初風吹送り
 小哥自慢に月をあらそふ
 大鼓持かさしの花の一さかり
 床机御免とつくる春雨
 沢水の氷の流れ冷者しや
 浪のみとりは濃茶也けり
 松風も袖吹かへす革羽織
 岑には雲のをこる疥癬
 夕虹の跡たちかくす針仕事
 をふさかゝれるとうらんの口
 鏡鉢の音にまかひし玉薬
 御城の前を施餓鬼の勅進
 文月の影に月毛の馬責て
 野は蘭茶宇にもみうら
 いにしへも我こそはぬへねちふくさ
 釈迦^ニ二仏の是は聞舍利
 都にて泉涌寺とそ申なり
 一二の橋を過る旅人
 闍取てそれかとはかりかはし駕籠
 煮うり屋さしていそげとこそは
 強盗の心をくたく千々の花
 もの見の松に咲る藤か枝
 隅矢倉たゝ手の下に夕霞

本秋 均朋 正猛 集言 柴舟 正信「十三オ」 本秋 益翁 宗先 益友 勝政 益翁 本秋 均朋 勝政「十三ウ」 宗先 益友 勝政 益翁 本秋

その置火燧春を暮行
疝氣病声も悲しく鳴蛙
水のにこりをえらふ毒断

益春
正猛
正信

益友 八 益翁 十二
益春 八 正猛 九
本秋 十 宗先 九
柴舟 八 集言 八

均朋 九
正信 九
勝政 九
九十四オ

第四 時鳥何鐘

木枕やいたくぬ夜の時鳥
卯花さける床縁
垣ね水さはき漆の色見えて
霜の下風かよふ町もの
地奉行も又改る浅茅原
秋の胡蝶の舞ふ能芝居
日かけさす月の朝の出立食
かた腰かくる草ふきの露
世を捨て又入込の風呂の内
釣行燈も法のともし火

益春
柴舟
益友
正猛
本秋
集言
益翁
正信
宗先
均朋

二

石塔の数かさなりて高野山
谷の扉に化物がある
木葉かく袖に金札給はりて
霜猶白きおしろい所
打むれて千鳥友呼楽屋入
千部の経も夕浪の声
はゝかゝも塩なれ衣身にふれて
煎茶をわかす柴といふ物
頭痛気もをこると見えし岑の雲
前句むつかし高間葛城
及なき扨子柱杖に月と花
喝食あれは児さくら有
遠近の霞をくゝるおいこくら
重なる山も双六の石
世のうきも住はすまるゝ継子立
草の庵の井戸やほるらん
酒蔵の軒降過る夜の雨
嵐にこもる松尾の札
光なき嵯峨土器に十二灯
君か御幸は閏月ても
古寺も絶せぬかねの利算用
狸のつゝみ太夫もとして
猫またも千夜を一夜の大蹄

勝政
益春
柴舟
益友
正猛
本秋
集言
益翁
正信
宗先
均朋
宗先

二ウ

扇小箱にすてうちはあり

杉焼の煙にくるゝ秋の月

つらなる鴈や割板の文字

萩の声皆同音に念仏を

浜路の浪に舟かしつむそ

いけ鯛の汐にゆるるゝ哀しれ

京衆待間もせはしなの世や

積置も高き薪の負せ方

暮行年かなんてとられう

御里かへり雪打払ふかけもなし

若後家ひとり竹のの下臥

ころゝと坊主も落る伏見山

鹿の声ゝ名譽のいさかひ

秋の野を分れば末に犬と猿

知死期をくりて詠やる月

今ははや土壇と成し花の山

四座の役者に蝶のたはふれ

江戸詰のお影おもへは春の日も

拜借米の苗代の水

金山の夕にさはく村雀

吹矢もたせて生野ゝ道筋
張貫に誰か作りし鬼か城
観音のひかりねり供養也

勝政

益春

正信

益翁

集言

勝政

宗先

均朋

益友

柴舟
本秋「十六オ

集言

益翁

正猛

正信

益友

益春

宗先

正猛

益春

集言

益翁
本秋「十六ウ

三ウ

ひいやひいとんゝとうつ滝つ浪

芸わたしして遊ぶ山姫

染出す紅葉の錦ゆるし紙

勅使はたつて秋の夜の月

白露の玉のかんさし是は又

野を分衣今衣裳櫃

草かくれとゝろく音の車鏡

えとにうつせる其日の鼠

西寺の煙絶せぬ常香に

たはこすきして住柳陰

駕籠かきの片岡野辺の春ならん

葬礼あはれ雉子鳴声

夕暮の霞の衣ひたりまへ

商損のかねひゝく也

廻船も爰を泊りの波の上

うつる日影をあらふ酒樽

時雨行雲より跡は雹灰

そゝきて露を残す吹水

ひかりあるしやほんに見えて空の月

墨けをおとす衣うつ音

古郷の花も散ては引板に
老のうくひす隠居こしらへ
雪消る山をむかへて国大名

均朋

正信

正猛

勝政

本秋

益友

正信

柴舟

益春

益翁

勝政
本秋「十七オ

柴舟

均朋

益友

勝政

益翁

集言

正猛

正信

宗先

益友
集言

安堵の御教書鉛をんせう

操をしかけていそく早飛脚

これはいつれの町のねりもの

添興に其出外家あまた也

山より座主の下り給へる

都には御煩と成て腹中気

味噌汁けふる黒雲の空

すりこぎの音もとゝろに鳴神の

柱一本須磨の旅ふし

奉加帳夜寒はけしき折なれは

うき世を秋に俄道心

父の塚おしへてかへるけふの月

東山より露を悲しむ

朝顔の花の蒔絵も時代物

此宮とこゝろてらす短檠

夜習に猶ほしうたふ声はして

大勢あつまり宿直もる袖

弓弦うつ路は必酒にせい

化生はにけて先おちついた

花に鳥那須野をさして飛て行

与市か馬に春おしむ空

宗先 十七ウ

柴舟

正猛

益翁

勝政

正信

本秋

均朋

益友

宗先

益春

本秋

益翁

正猛

本秋

益友

勝政

宗先

正信

益翁

柴舟

柴舟 七

益友 十

正猛 九

第五 納涼樽 何

茶屋の床かりに居にけり夕涼み

蚊遣のけふり提たはこ盆

小硯も明やすき夜の空晴て

かくし横目や月の下駄

取分て大たい名の袖の露

伽羅て間して菊の盃

隣棧敷幕打廻し屏風たて

御客馳走もこのうへは扱

君か代に朝鮮人もわたりきて

あふら扇に天の羽衣

松高き小風呂の内やけふるらん

小哥淨留利鶴のもろ声

職人も古き都の跡とめて

石盥鉢ものこる難波津

めゝさこもつかふ入江の浪の色

集言 八

益翁 十一

正信 十

均朋 七

勝政 十

柴舟

正猛

益春

集言

益友

正信

本秋

均朋 十九オ

益翁

宗先

勝政

柴舟

正猛

益春

集言

益春 八 本秋 十 宗先 十

二

虫くひ齒うつほの松も年ふりて
 涎の雫正木ちる山
 尺八を吹送たる風の露
 曲三味線に月を友とす
 たいこ女郎淋しき闇の花薙
 富士かうらみや夕暮の春
 奉公に情のこしてかへる鴈
 一番鐘の跡のしら雲
 見わたせは高間葛城真田山
 天王寺には岑の楠木
 古ひたる額の銘こそまことなれ
 はらみ発句て使これ迄
 上座持和田に大きに腹をたて
 いや氣にいらぬむこの浦浪
 水鳥のかふりをふるもうき思ひ
 中風によはき芦の葉隠
 五木湯もかきあつめたる藻屑火に
 乞食のすめる笹の屋の内
 短か夜の月をあらそふ敵討
 狂言しくむ卯花の陰
 玉川のたまの振廻何とかな
 妻なし千鳥女房よはれた
 門徒坊茅原か末を忍ひ路に

正信
 本秋
 均朋
 益翁「一九ウ」
 宗先
 勝政
 本秋
 宗先
 益翁
 柴舟
 均朋
 益春
 益友
 益翁
 勝政
 均朋「二十オ」
 正猛
 正信
 益春
 集言
 宗先
 益友
 集言

三

露分衣ひはたの小袖
 はるかなる東京袖きれくす
 貨物にかゝる月の下風
 しまうた屋軒端の山は雲晴て
 あるいは茶の湯松の一村
 道具すき目をおとろかす今朝の雪
 文の文には弓矢長刀
 扱こそはさらぬ別れのさらし者
 涙の色は朱印也けり
 菓子袋かみを祈れる花の袖
 藤のかつらやこより成らん
 耳たれに聞かぬは春の時鳥
 山はかすみのかゝる瓔珞
 舍利塔も明ほのゝ空ほの見えて
 肌の守をのこすきぬく
 まおとこの来たる所を一刀
 外郎餅も恋の中立
 かりそめも契もふかき部屋見廻
 御伽の御前か翠を枕に
 遊山舟磯によすれば松の風
 汐なれ衣広袖にして
 道外にも雲井の鴈の声す也
 はなし上手を待宵の月

益春
 益翁
 正猛
 正信
 勝政「三十ウ」
 本秋
 益翁
 正猛
 宗先
 均朋
 柴舟
 益友
 益翁
 勝政
 正猛
 宗先
 柴舟「二十一オ」
 本秋
 均朋
 集言
 益友
 益春
 正信

二ウ

大闇のあたりをさらぬ秋の風
露草ふかくなれる豊国

何石が稲葉菊込御調物

民の竈にしろき酒かふ

五人与世のことはりをおもへとも

新古今をもえらふましはり

きり出す泉の杣の筋かよい

御一門家の紀路の遠山

降雪の白きをみれば箱棟に

小篠をわけて荷ひ物出す

棺桶の煙悲しき野辺の末

露霜のこる剃刀のうへ

初嵐喉の下迄通ひきて

雲には月のくるゝ瘰癧

花に来る阿蘭陀人を呼よせん

毛類と見ゆる鳥の囀り

綱貫に踏跡清き春日影

東風吹通る肴店より

井戸水の流の氷とけそめて

苔むすはかり半切も有

松は千とせ生歎死事やゝ久し

山は青山寺は門前
琵琶の音に宮の御謀反隠なし

均朋

勝政

宗先

本秋

集言

正信三十一ウ

益翁

益友

柴舟

集言

正信

宗先

益春

均朋

勝政

正猛

正信
本秋三十二オ

益友

益春

益翁

柴舟

正猛

鳳凰はふく紅井の旗

絵簾も同じく神の宝物

五十の川にうかむか御座

みとりある百枝の松はくんはも

ともり声して零かける空

真砂地の露も乱てせき分か

若衆もらふ袖の夕月

哥舞妓座に思ひを残す小萩原

させる筒迄けふる薄霧

やいてつち岑より風の吹絶た

医者殿もろ共帰る柴人

着なれたる麻の衣は長羽織

木曾路の花に乗物の供

谷川の雪と消行葬礼に

山もかすみに籠る町衆

宗先

本秋

正信

勝政

益翁

均朋

集言三十二ウ

宗先

本秋

勝政

均朋

益友

益翁

正信

集言

益翁

宗先

正信

勝政

均朋

集言

(以下次号)